

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593405

研究課題名(和文) 医療介入が必要な重症乳腺炎診断アセスメントツールの開発

研究課題名(英文) Development of an Assessment Tool for the Diagnosis of Severe Mastitis Requiring Medical Intervention

研究代表者

長田 知恵子(Osada, Chieko)

杏林大学・保健学部・准教授

研究者番号：30458393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、医療介入が必要な乳腺炎を見極めるための「授乳期の乳腺炎診断アセスメントツール」を開発する一環として、その有効性を検討することを目的とした。

その結果、ツールを用いた助産師らの結果と超音波検査による重症乳腺炎の判別の違いはなく、母親によるアンケート結果からも重症乳腺炎の見落としはなかったことが確認できた。乳汁の培養結果では感染性乳腺炎の原因菌と言われている黄色ブドウ球菌等も検出されなかった。またツールの信頼性を検証した結果、施設間の違いがないことも確認できた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to examine the efficacy of an “assessment tool for the diagnosis of mastitis during the lactation period,” designed to ascertain mastitis in need of medical intervention, as part of this tool’s development. The results of this study revealed that there was no difference between the results obtained by midwives using the tool and the discrimination of severe mastitis by ultrasound examination. The results of a survey of mothers also confirmed that severe mastitis was not overlooked. The results of a breast milk culture test indicated that no *Staphylococcus aureus*, which is said to be a causative bacterium of infectious mastitis, was detected. We also verified the reliability of the tool and were able to confirm that there were no differences between facilities.

研究分野：医歯薬学

キーワード：助産学 母乳育児 アセスメントツール

1. 研究開始当初の背景

(1) 母乳育児支援に関する現状

母乳で子どもを育てることは、細菌性髄膜炎や気道感染症などの感染性疾患の発症頻度を減少させるばかりでなく、乳児突然死症候群 (SIDS) や乳癌の発症率も減らすなど、数多くの恩恵があることが確認されている。しかし、医療支援者の多くが母乳育児に関する研修を受けずに支援を行っており (松永、2005)、経験に裏付けされた知識とケアに頼わざるを得ないことから、スタッフの育成を課題とする施設も多い。なかでも重症乳腺炎において医師への照会は、即時判断が求められることから、看護者にとって最も難しい判断である。しかし残念ながら、現在、それを見極める客観的な指標はなく経験知で行うしかない。

このように、我が国において母乳育児の普及を促進するには、支援をする看護者の教育システムの構築であり、そのための基盤作りとして客観的指標を開発することが挙げられる。

(2) 現存する母乳育児に関するアセスメントツールについて

授乳期の乳腺炎は、何らかの原因により乳房内から乳汁がうまく排出できなくなると乳房内に“乳汁がうっ滞”し発生する。さらにこれが進行するとうっ滞性乳腺炎、感染が加わると化膿性乳腺炎となり、処置が遅れ進行すると乳腺膿瘍を形成する。このように当初は乳汁のうっ滞であっても、初期対応を見誤ることで膿瘍を形成し、乳房の一部を切開しなければならぬ危険性もあることから、適切な時期に乳房状態を判断し、支援の方向性を決めることは極めて重要である。

しかしながら、現在、日本で入手可能な授乳期の母乳育児に関するアセスメントツールは、国内外合わせて10 (和文献2、洋文献8) であった (長田、2010)。このうち、子どもの飲み方や母乳育児の知識、支援のスキルを観るものが多く、母乳の分泌状態を見極めるものは皆無であった。このように、現在、授乳期の母乳育児に関するアセスメントツールは国内外ともないことから、その開発が望まれているといえよう。

以上の結果より、これまでに授乳期の乳腺炎診断アセスメントツール (長田、2012) を開発してきた。しかしこのツールは、母乳育児支援歴8年以上の看護者を対象に検証してきたため、使用者が限定さるといった難点があった。そこで、母乳育児支援をする看護者なら誰もが使用できる汎用性の高いツールを開発することが必要と考えた。

2. 研究の目的

(1) 表面妥当性と内容妥当性の検討

研究をするにあたり、第1段階の目的は、新人や若手看護者でも使用できる汎用性の高いツールを開発することを目的として表

面妥当性と内容妥当性の検討を行うことであった。つまり、まずは新人や若手看護者によるツール項目の見直しや用語の検討、使用する際の所要時間、さらには項目間の関連性など、内容妥当性や表面妥当性を検討することを目的とした。

(2) プレテスト

第2段階としては、プレテストとして本調査をふまえて、調査の可能性について検討することを目的とした。つまり、このプレテストの目的は、対象者への負担を最小限にするとともに、第3段階の本調査と同様の調査を小規模集団で行うことにより、大規模調査の可能性について検討することであった。

(3) 本調査

第3段階として、プレテストの結果をふまえ、協力母子を増やすとともに施設間の違いの有無を検討することを目的として行った。

3. 研究の方法

(1) 表面妥当性と内容妥当性の調査

研究の趣旨に賛同し、同意を得られた看護者らに、実際の母乳育児支援場面で本研究のツールを使用し、負担感や用語の適切性等について意見を求めた。得られた意見を基に、ツールだけでなく、使用する際の説明文も追加変更した。

(2) プレテスト

本研究の趣旨に賛同し、研究参加に同意した看護者で、乳汁生成期 (出産後9日目以降) のケースを対象に母乳育児支援をしていることと、母乳育児支援の際に、看護者自らの手で乳房の診断を行っていることを条件とした。一方、研究協力者である母子は、母乳育児を希望し、調査対象施設の母乳外来 (母乳育児相談室) に支援を受けにいらした母子とし、研究の趣旨にご理解をいただき、研究参加に同意することを条件とした。なお、乳房疾患の既往があるケースは除外とした。調査手順は、担当看護者らによる乳房ケア後に、ツールの記載を依頼した。さらにプレテストでは、看護者らによるケア中に乳汁を採取し、またケアの後に超音波検査を行った。

さらに協力母子には、来所目的や産後の日数、分娩歴等の基本的データについての質問紙を来所時に記載依頼した。また、協力母子の許可を得て、その調査後1~2週間後に、調査時からそれまでの状況についての質問紙を郵送で調査した。

(3) 本調査

プレテストの結果をふまえ、施設間の違いを調査するため、エクセルの乱数表を使用し、調査施設を選択した。施設長への説明および助産師らの同意を得られ、3施設で調査を実施した。協力母子への説明および同意等の調査方法は、プレテストに準じた。

4. 研究成果

(1) 表面妥当性と内容妥当性の調査

46組の母子の協力を得て、計10名の助産師(乳汁生成期の母乳育児支援歴:0~16年、平均4.8年)が本件のツールを使用した。

その結果、“乳房の弾力性”や“可動性”の判断が難しいというように、触診に関する項目の判断が難しいということがわかった。以降の調査のため、ツールの説明を丁寧に行うこととし、文章化した。

以上の結果、12項目から成る医療介入が必要な重症乳腺炎を見極める「授乳期の乳腺炎診断アセスメントルーツ」の表面妥当性および内容妥当性を検証することができた。

(2) プレテスト

プレテストでは、対象施設1か所で計76組の母子の協力を得ることができた。対象乳房数は、152であった。看護者の診断によると、「母乳の分泌不足」「分泌不足感」など乳汁の分泌不安に関することが27.6%、「乳房緊満」や「乳汁のうっ滞」「硬結」は、9.8%で、「乳腺炎」が3.3%、「膿瘍で外科的処置」は0.7%であった。分娩歴は、「初産婦」60.8%、「経産婦」は37.9%であった。児の性別では、「男児」45.3%、「女児」が54.7%で偏りはなかった。

信頼性分析としてCronbachの係数は、ツール全体(12項目)で0.83であり、信頼性は確保できた。

本研究で検証しているツールは、これまでの調査により、合計得点が32点以上の場合には医師への照会が必要とする結果が出ている。今回の調査において、合計得点が43点(範囲:12-60)の「乳腺膿瘍」で外科的処置が必要なケースが1件あった。そのケースの超音波検査による画像診断で膿瘍は確認されたことから、画像診断による検証ができた。一方、それ以外のケースでも、乳腺の画像判読の経験が豊富な検査技師による画像診断と、看護者の視触診による診断による医療介入が必要な重症乳腺炎の違いはなかった。

さらに、協力した母親からの2回目の質問紙調査の結果より、調査後に医療介入したというケースはなかったことから、重症乳腺炎の見過ごしはなかったことも確認できた。

また乳汁の培養結果では、感染性乳腺炎の原因菌として多いと言われる黄色ブドウ球菌や連鎖球菌も陰性であることが確認できた。

(3) 本調査

3施設、計152名、対象乳房数275(最終有効回答数)で調査を実施した。

その結果、調査施設Aの看護者による診断では、「乳汁うっ滞」「乳腺炎」が49.1%、調査施設Bでは「白斑」「硬結」が19.1%、調査施設Cでは「乳汁うっ滞」「白斑」が8.8%

と、母乳育児相談室によって、主要な母子の来所目的は異なっていた。

信頼性分析として、ツール全体(12項目)のCronbachの係数は、施設Aでは0.865、施設Bでは0.871、施設Cでは0.852であり、ツールとしての信頼性は、施設間が違ってても確保できていたことが確認された。

今後、さらなる調査ケースを増やし、医療介入が必要なケースを見極めるアセスメントツールが臨床的に有用である検証を行っていくことが課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

長田知恵子:母乳哺育で困っています!そのトラブル、誤解から始まっているかも?!、静岡県母性衛生学会誌、査読無、第4巻1号、2014、45-47

〔学会発表〕(計1件)

長田知恵子、堀内成子:若手看護者の母乳育児における臨床判断の不安、日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第15回大会、2013、7、7、聖路加看護大学(東京都)、2013、7

〔図書〕(計1件)

堀内成子、飯田真理子、中村幸代、永森久美子、八重ゆかり(長田知恵子)、エビデンスをもとに答える 妊産婦・授乳婦の疑問 92、p158、162-167、171-175、190-193、149、南江堂、2015、6

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

公開講座

長田知恵子:子どもと親にやさしい子育て、

孫育て、静岡県立大学公開講座、中部会場(静岡県) 2013、11、16

研修会

長田知恵子：母乳育児支援を学ぶ - 母乳育児支援を研究テーマとして考える -、一般社団法人 静岡県助産師会 勤務助産師部会 研修会、静岡県男女共同参画センター(静岡県) 2013、12、7

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長田 知恵子 (OSADA Chieko)
杏林大学・保健学部・看護学科・准教授
研究者番号：30458393

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

大平 愛子 (OHHIRA Aiko)
大平母乳育児相談室 助産師

井上 明美 (INOUE Akemi)
井上母乳育児相談室 助産師

高藤 好美 (TAKAFUJI Yoshimi)
酒井産婦人科クリニック 助産師

吉永 真理子 (YOSHINAGA Mariko)
吉永母乳育児相談室 助産師